



知床財団とは？

- 1988年に設立
- 職員数は約40名
- 業務内容
 - 野生動物の調査・研究
 - 野生動物対策
 - 森づくり(森林再生)
 - 自然系施設の運営

斜里側
職員8名 + α (銃所持者4名)

羅臼側
職員4名 + α (銃所持者4名)

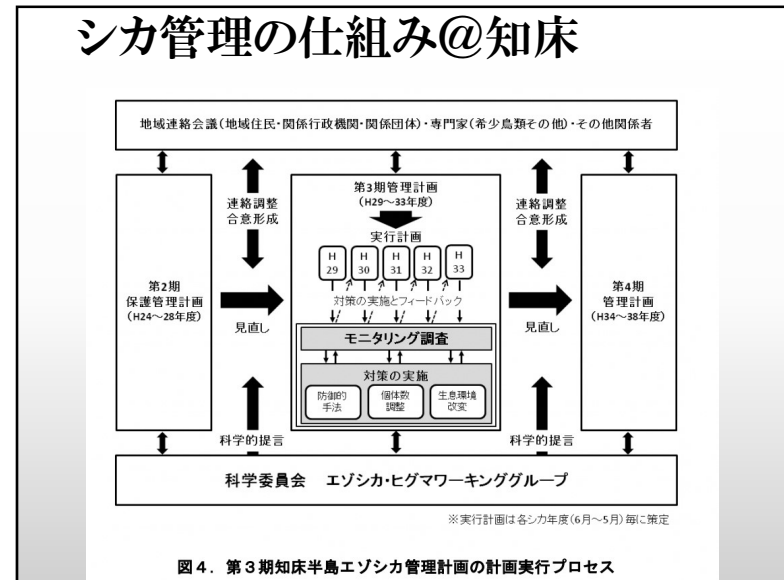
対象範囲

遺産地域(陸域)
• 487.5km²
(≒鳥獣保護区)

隣接地域は可猟区
(一部除く)

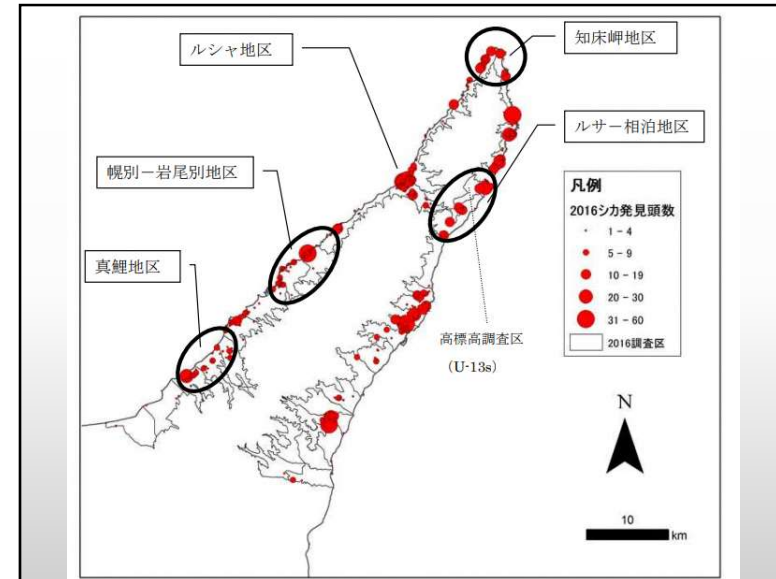
知床半島エゾシカ管理計画・地区区分図

- エゾシカA地区
- 特定管理地区
- エゾシカB地区
- 隣接地域
- 世界自然遺産地域



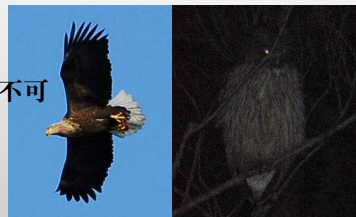
シカ管理の経過@知床

- 自然環境保全を主目的とした個体数調整
 - 環境省が捕獲を開始、2007年～
 - 林野庁が捕獲を開始 2010年～



困難な条件

- 通行可能な道路が少ない(中央部)
- そもそも道路がない(先端部)
- 流氷で冬は船を出せない(特にオホーツク海側)
- ヒグマが多い
 - わなの使用は冬期のみ
 - 銃猟の際も警戒が必要
- 観光利用が活発
 - 利用拠点周辺で銃は使用不可
- 希少猛禽類の生息地



シカ管理の実際

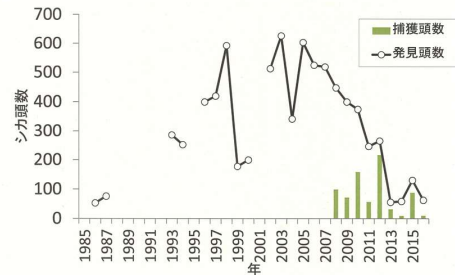
- 銃猟
 - 巻き狩り
 - 仕切柵を使った巻き狩り
 - 流し猟式SS
 - 待ち伏せ式誘引狙撃
 - 船上からの狙撃
 - 忍び猟
- わな
 - くくりわな
 - 箱わな
 - 囲いわな・大型囲いわな



管理事業の成果



- シカの密度は低下、植生は回復途上
- 密度は10～15年で半減以下、場所によっては1/10に



個体数調整実施地区におけるエゾシカの劇的減少 (例:知床岬先端部)

利活用の状況



- 西側で先行した利活用、東側では停滞
 - 西に大きな利活用施設
- 西側でも捕獲が進み...
 - 捕獲数が低下 (= 商材が少なくなる)
 - 生体捕獲は困難に
 - 利活用に不向きなくりわなや箱わな捕獲が増加
 - 打撲や内出血
 - 警戒されることを回避するため、わな至近での放血は行っていない。その結果、止め刺しから放血まで時間がかかる
 - 利活用施設に持ち込むまで一定時間を要する
- 利活用施設に持ち込んでも廃棄の場合も...
 - 実際の利活用率 < 持ち込み率



知床シカ管理の特徴

- 職業的に実施
 - スタッフ16名程度 (うち4名アルバイト)
- 地域に密着した団体が継続的に取り組む
- 地元ハンターの理解・協力 (= 有能なハンターの知識や経験を活用することができた)
- 世界遺産管理の仕組みが機能した
 - 管理計画 (含む実行計画)
 - 有識者会議 (シカWG・年2回)
 - 知床データセンター
 - 報告書や会議資料はすべて公開
 - モニタリング事業の実施



密度低下に伴う課題



- 自然環境保全: 低密度
- 資源活用 (食肉利用): 中密度～高密度
 - ギャップがある
 - どの程度が望ましいのか?
- 食肉資源としてのエゾシカ
- 狩猟資源としてエゾシカ (隣接地域)
 - = 低密度化で狩猟資源としての価値がダウン
 - = 狩猟活動が減少、利活用施設の運営難
 - 保護区内は低密度、隣接地域は中密度?
 - 隣接地域の管理方針が今後の課題

課題

- 事業の評価は捕獲数では出来ない
 - 植生の回復状況 ・生息密度
 - 順調に進めば捕獲数はすぐに低下する
- 低密度を維持するための捕獲手法
- 継続したシカ管理のあり方(社会環境)
 - 狩猟 ・有効活用 ・個体数調整
 - 地域経済への貢献(雇用)
 - 有害駆除が拡大する現状を憂慮